ISSN 0454-8213

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin　Vol. 28, No. 4 (1993)

目　　　次

ドイツ統一後の図書館

ヴォルフガング・ミヒェル

修道院の図書館を始め，新旧大学附属図書館，市立，州立，国立の図書館，専門文書館，あるいは種々の保管局や財団が経営する図書館に至るまで，ドイツの図書館は様々な歴史的変遷を経験してきた。元のままの姿をとどめているものもあれば合併したり分割したりしたものもある。ドイツの中央権力の基盤は，大抵の場合政治，経済の各面にわたって脆かったので，各地域は比較的均衡のとれた発展を遂げてきた。図書館の分布と内容もこうした歴史の流れを反映している。

第二次世界大戦中，蔵書の多くが郊外の旧鉱山，洞窟などに移され，空襲を免れたにもかかわらず，損失は大きかった。また終戦前後の混乱の中，絵画，骨董品と同様に数多くの貴重な出版物が西へ東へと消えていった。その一部は，西側戦勝国と1952年結ばれたドイツ条約によって戻ってきた。それでも個人の遺産オークションなどでは，消息不明になっていたものが今日でも出てきたりすることがある。所有者が幾度も変わり，法律上種々の困難な問題があるので，返還交渉の殆どは買い戻しという結果になる。また，ソ連崩壊後，モスクワ，ペテルスブルクなどでも莫大なドイツの蔵書が再び日の目を見た。冷戦時代中，ソ連の図書館員や修復者が懸命に守り通したものもあるが，湿気やかびだらけの地下で忘れられ，かなり痛んでしまったという調査報告もよく新聞に載っている。ロシア側は原則として返還の用意があるが，生活が日々厳しさを増すなか，外貨で誘う西側の収集家や闇商人の元へかけがえのない書籍が次々と消えていき，元の所有者への返還は時間との戦いになっている。

かつてドイツ帝国の東部であったシレジア，東プロイセンなどの地方は現在ポーランドとロシア領になっている。昔のブレスラウ，ダンツィヒやケーニヒスベルクの出版社から限定版で発行されたものは地元の図書館にしか保存されていないこともある。ナチスドイツが引き起こした戦争による領土の縮小を一種の歴史的懲罰として受け入れたドイツはそれらの図書などの「返還」を要求する権利も放棄した。幸いにも，戦後そこで育った世代は東西間の緊張緩和や新しく築き上げられつつある友好関係のお蔭で，自分の故郷の歴史を冷静かつ正確に見つめようとしている。史料編さん所，図書館，公文館のドイツ語書籍の保存や閲覧も以前より容易になった。

戦後，ドイツ人のみが住む「残部ドイツ」(Restdeutschland) の文化生活も引き裂かれた。元の資産の分散や東西の対立のため，両ドイツに Duden, Brockhaus, Kiepenheuer などの同名の出版社が誕生した。また，西ベルリンにプロイセン国立図書館が新設され，終戦頃至る所に分散して保管されていた書

籍を手当たり次第収集した。古い本の図書カードにはよく，この書籍は「ウンテア・デン・リンデン通り」にある，と付け加えられている。それは「向こう側」（東ドイツ）の元のプロイセン国立図書館を意味したものであった。ブラント政権下の緊張緩和を目指す「東方外交」のおかげで，70年代以降この二つの図書館の間の電話連絡が認められるようになった。1990年末のドイツ再統一後は，両方の図書館もまた組織上一つになり，東側には研究者のための，西側には一般向けの図書館を置くということや蔵書の再編成の同意ができている。

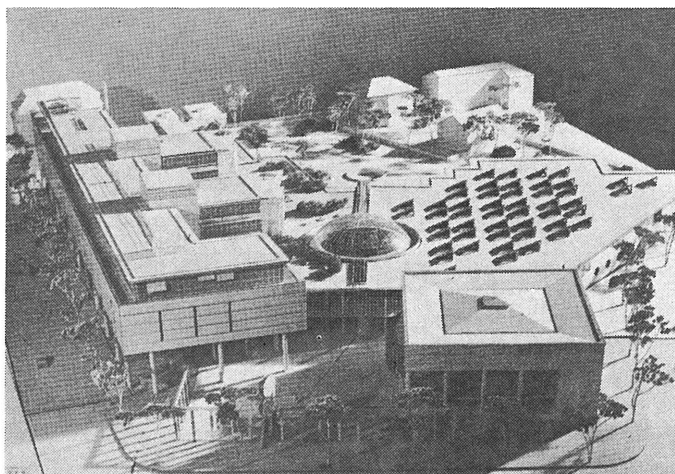
私が育った旧西ドイツは，地方主義の伝統を重視してきた。今日のドイツ連邦共和国においても，教育制度などを含む文化統治権は，それぞれの州にある。したがって，戦後の図書館制度の再建に際しても州によりさまざまな方針があったが，利用上の改善のため，多少とも総合的な対策が避けられなかった。いわゆる「重点目録」(Zentralkatalog) を七つの州に作り，それぞれが担当地城の図書を登録することにした。 70年代末から徐々に 「ドイツ語による文献の総合目録」(Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums) が発行されたが，残念なことにそれも1700年以降の分に限られており，それではなお不完全であるということがわかった。写本などの資料に関しては特にベルリンで全般的な把握を目指しているが，この場合も，統一後，仕事は山積している。

かつて出版界で名を駆せた東部のライプツィヒにある「ドイツ図書館」(Deutsche Bücherei) は，約80年前に設立されて以来，ドイツ語の新刊を集めている。戦後まもなく，私の故郷フランクフルトには「自由ドイツ」を標として，ほぼ同名の「ドイツ図書館」(Deutsche Bibliothek) ができ，西側の出版社には新しい刊行物を一冊ずつそこに寄贈することが義務づけられている。ここには「高等な」文学作品や学術書のみならず，後世に現代社会の実情をそのまま伝えるため，料理本，好色本，はては掃除機の取扱説明書にいたるまで保管されている。毎日1000冊もの新刊が1200万冊の蔵書に新たに加えられている。1990年の統一条約により，上述の両図書館は Die Deutsche Bibliothek注 として統合され，その後新刊書はそれぞれ一部ずつライプツィヒとフランクフルトへ送られるようになった。ライプツィヒの方が伝統はあるが，そこに集められている戦後の西側出版物の数は少ない。フランクフルトの方は最新の技術の導入により，迅速でみごとなシステムになっている。

戦後のフランクフルトはまた，国際書籍見本市を開き，ライプツィヒの伝統的見本市を圧倒してきた。その見本市に行くと，作家たちは，本を出すのに果たしてまだ意味があるのだろうかという疑問を抱き，あちこち見て回る一般の読者も読書意欲を失いかねない程その規模は年々大がかりなものになってきた。

旧東ドイツでは政治的に好ましくない図書館，財団などは厳しい統制を受けた。たとえば敬虔主義の牙城であったハレの Francke 牧師が約300年前設立した蔵書や博物標本のコレクションを管理するフランケ財団はその代表的な例である。国家の補助金が意図的に縮小されたため，建物全体は文字どおり徐々に老朽化してしまった。屋根には穴が開き，しっくいは落ちかかっていると，そこを訪れたことのあるひとの報告を読んだ。1988年には，数階に亘って置いてある書架などにまる一日ひっきりなしに雨が入り込んだ。昨年以来，財団の施設が修復され，さらにハレを1994年からヨーロッパ啓蒙主義研究の中心地にしようという準備が進められてる。有名な西部のヴォルフェンビュッテル研究図書館，マールバッハの文学館や東部のゴータ研究図書館と並んでハレは間違いなく国際的な出会いの場になるであろう。

最後に欧日両方の図書館を長年に亘って利用してきている者として幾つか気付いた点を付け加えたい。ドイツの図書館の特徴は一口で言って開放的である点にある。成人，つまり18才以上で身分証明書を携帯していれば，殆どどの図書館でも全書籍を閲覧室で読むことができる。これは旅行者でも同様である。よく整理が徹底した施設では貴重書でもすぐに出してくれる。書庫が別な場所にある場合には半日位待つこともある。図書館によっては，旅行者用に１日かぎりの証明書を数分のうちに発行してくれるところもある。大学図書館の多くが一般の人向けにも公開されている。たとえばフランクフルトの場合は市立図書館，大学図書館，自然史博物館附属の図書館が一つになって

いる。これだけの設備とスタッフがそろうと，能率のよいサービスが受けられる。そこは写本，地図，古書，自然科学系等，いくつもの専門分野に分れている。職場の配置換がないので，係員は大抵その担当分野に関してはかなりの専門家になっていて，蔵書を熟知しており，研究内容上の問題にまで立ち入ってアドバイスと手助けを与えてくれることがある。勿論ドイツにも満足のゆかない図書館はあるが，快適で近代的な閲覧室としては，例えばプロイセン国立図書館(西ベルリン)がそのよい手本である。天井が高く，館内の様々な閲覧区域がテラス式に設計されていて，あらゆる処に目を喜ばせてくれる緑地帯や採光のよいテーブル，手頃なカフェテリア，休んだり勉強会ができる広いロビー等が設けられている。フランクフルトの新しいドイツ図書館も将来へ向けての基準を設けるであろう。旅行中でも気軽に各地の図書館に立ち寄られるようお勧めしたい。公の図書館はただ本を山積みにするだけの場所ではなく，スタッフを含め面白くて「変わった」人々の溜まり場でもある。

フランクフルトの「ドイツ図書館」（1997年完成予定）

注 Bücherei と Bibliothek の意味は一致しているが，外来語の Bibliothek に対して純ドイツ語の Bücherei は設立当時のナショナリズムを示唆している。また統一後の名称に付けられた特定のものを指す定冠詞dieにより「この一つしかない」という面が強調されている。

（言語文化部　助教授）

本学教官・名誉教授著作寄贈図書

≪中央図書館≫

白水　晴雄（理・名誉教授）
「石のはなし」
技報堂出版　1992

松田　時彦（理）
「動く大地を読む」
岩波書店　1992

宮崎　一郎（医・名誉教授）
「Helminthic zoonoses」
International Medical Foundation of Japan
1991

和田　光史（農）
「Keys to soil taxonomy」
Pocahontas Press　1992

≪中央図書館・経済学部図書室≫

西村　明（経）
「環黄海経済圏創生の課題と展望」
九州大学出版会　1992

≪教養部分館≫

恒吉　法海（言）
「レヴァーナ：あるいは教育論」ジャン・パウル著　恒吉法海訳　九州大学出版会　1992

≪経済学部図書室≫

松下　志朗（経）
「入門民衆と差別の歴史」
明石書店　1992

≪農学部図書室≫

江藤　守総（農）
「Environmental health criteria」No. 132-133
Morifusa Eto and others
World Health Organization　1992

「Handbook of organophosphorus chemistry」
Morifusa Eto and others
M. Dekker　1992

「Insecticides: mechanism of action and resistance」
Morifusa Eto and others
Intercept　1992

(((図 書 館 統 計)))

平成3年度　中央図書館・医学分館・教養部分館サービス統計

	中央図書館(理・農を含む)	医学分館	教養部分館	合　計
入館者数	260,500	116,485	239,576	616,561
(学外者：内数)	(3,619)	(1,325)	(665)	(5,055)
館外貸出冊数	46,899	28,883	32,803	108,585
内訳 教職員	4,267	14,321	20,183	38,771
内訳 学生・院生	41,383	14,562	12,620	68,565
内訳 学外者	1,249	0	0	1,249
レファレンス件数	9,590	9,051	3,353	21,994
内訳 教職員	3,118	6,611	1,677	11,406
内訳 学生・院生	3,962	421	1,437	5,820
内訳 学外者	2,510	2,019	239	4,768
内訳 所在調査	7,344	4,744	1,509	13,597
内訳 事項調査	1,044	3,617	838	5,499
内訳 利用指導・その他	1,202	690	1,006	2,898
オンライン情報検索サービス件数	298 (申込数)	3,295	—	3,593
内訳 DIALOG	240	—	—	—
内訳 JOIS	63	3,295	—	—
内訳 NACSIS-IR	1	—	—	—
文献複写サービス件数	74,352	93,417	3,134	170,903
内訳 学内者の複写件数	62,562	58,983	2,969	124,514
内訳 学外からの受付件数	8,807	26,980	—	35,787
国内	8,800	18,413	—	27,213
国外	7	8,567	—	8,574
内訳 学外への依頼件数	2,983	7,454	165	10,602
国内	2,952	7,445	153	10,550
国外	31	9	12	52
図書・雑誌の相互貸借件数	690	31	90	811
内訳 他機関へ貸出件数	459	6	—	465
内訳 他機関から借用件数	231	25	90	346
国内	231	25	12	268
国外	0	0	78	78

◆ 研　　修

総合目録データベース実務研修に参加して

井ノ上　俊　哉

平成4年11月16日から12月11日までの4週間，学術情報センター主催の総合目録データベース実務研修に参加した。「目録所在情報サービスを利用している図書館において，目録担当者の指導，地域講習会の講師等を行う，高度な知識と技術を有する指導者の養成を目的とする」（平成4年度実施要項）研修で，本学からは8人目の受講であった。学術情報センターの目録所在情報サービス(NACSIS-CAT)を日常利用する際の問題点・疑問点をもとに考察したレポートと，目録システム講

習会講義要項を作成することが研修のメインだった。班単位(4人)での共同討議・作成ということで，他大学の情報や考え方も耳にすることができた。そのほか，総合目録データベースの品質を管理していくうえで不可欠な知識や，学術情報センターが実施しているILLシステム等のサービスについての講義，国立国会図書館や図書館流通センターの見学もあり，盛りだくさんな内容であった。個々の研修項目の詳しい内容については，以前に本学から参加した受講者の報告に譲ることとし，本稿では，以下，本学の図書館システムについて，現状と展望を目録システムを中心に述べたい。

本学では昭和56年より図書館業務の電算化を開始し，本格的な図書館ネットワークである「北部九州地区地域ローカルネットワーク」を全国に先駆けて構築した。地域ローカルシステムのうち，目録システムについていえば，オンライン共同分担目録の思想を地域センター(本学)を中心に，地域ネットワーク環境下で具体化し，資源共有化を図ろうとしたシステムであった。しかし，その後，コンピュータ技術，ネットワークシステム，通信技術の発達及び学術情報センターの発足によって，大学図書館のコンピュータ化は学術情報センターの目録・所在情報データベース(NACSIS-CAT)を利用した全国レベルのオンライン共同分担目録へと質的変化をした。ローカルシステムについても学術情報センターシステムに合わせた仕様が全国的に標準となった。

本学においても，昭和62年，学術情報センターに接続，翌年からNACSIS-CATへの入力及び地域ローカルシステムへのダウンロードを開始して現在に至っている。ところが，現状ではNACSIS-CATと地域ローカルデータベースという，ファイル構造，入力基準が異なる2つのデータベースの整合性をシステムチェックで完全にとることはできない。そこで，人手を介して「NACSIS-CAT形式の書誌記述を地域ローカルデータベース形式の書誌記述に表現し直す」といった考え方・作業を常に要求される。このことによって大きな人的負担を強いられており，目録入力から地域ローカルデータベース登録までに大きなタイムラグを生じているばかりでなく，本格的な遡及入力の体制に入れない状態にある。本学ではOPACの実現が遅れたうえに，現在提供できるデータは全蔵書数の約1割(約30万件)しかない。今，全国の国公立大学の過半数が計画的な遡及入力にとりかかっており，ローカルデータベースの即時更新も当たり前の時代である。自館独自の考え方で，NACSIS-CAT以上に精密な書誌データをローカルシステムに維持したとしても，それは図書館員の自己満足にすぎないのではなかろうか。利用者の立場を考えれば，むしろ，求める資料について，本学内の所在情報を迅速に，豊富に提供できる体制作りを急ぐべきである。

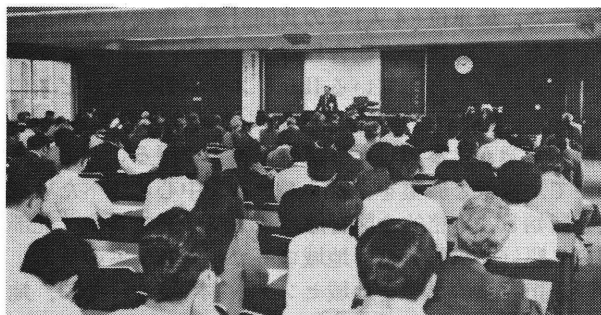
今後，ローカルシステムに対しては，「利用者サービスの拡充」が一層求められる時代になる。一方，定員削減や週休2日制実施に対処するため，業務の省力化・平準化も進めねばならない。次期目録システムにおいては是非とも，NACSIS-CATに即したシステムを構築して目録情報の作成・流通過程の自動化を現在よりも効率的に行えるようにしたい。即時更新，遡及入力によってOPACを充実させ，学内LANを通じて，よりレベルアップした全学的なサービスの実現に貢献できるように，今後取り組んでいきたい。

(情報システム課 第一目録情報掛)

(((学内マイク)))

第33回中央図書館貴重文物展観及び公開講演会

中央図書館では，去る平成4年11月の教育・文化週間に，第33回貴重文物展観(11月4日～11月7日)及び公開講演会(11月6日)を開催した。

貴重文物展観の今回のテーマは，「蒙古襲来絵詞を中心とした郷土資料」であり，「蒙古襲来絵詞(九大本)」，「同御物

本影印本」及び「蒙古寇紀」等の元寇関係資料，並びに郷土の著名な文人である貝原益軒，末永景順，亀井昭陽，大隈言道の自筆本，自筆書簡等計十数点を展示した。

一方今回は「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」と題する公開講演会を川添昭二九大名誉教授を講師に招いて併せて開催した。

今回は一般市民にも広く公開する趣旨で，マスコミ関係を通して積極的に広報活動を行ったこともあって予想を上回る反響があり，展観は期間中合計1,064名，講演会は会場が満席となる260名の参加者があった。

なお，今回の展観及び講演会開催にあたっては文学部佐伯弘次助教授をはじめ関係の方々にご協力いただいた。

(情報サービス課閲覧掛)

◆ 人事異動 (平成4年11月～平成5年1月)

(中央図書館)

12.2　村田　香織　情報サービス課参考調査掛（情報サービス課相互利用掛）（事務補佐員）

12.1　本山　　睦　退職(情報サービス課参考調査掛)（事務補佐員）

◆ 日　　録 (平成4年11月～平成5年1月)

11. 4　国立七大学附属図書館部課長会議（第25回）（大阪大学）
　　図書館貴重文物展観（第33回）7日まで
　　図書館職員研修会（学術情報センター米沢誠氏の講演会）
5　国立七大学附属図書館協議会(第66次)（大阪大学）
6　公開講演会
9　進学生オリエンテーション
　　学内LAN対策会議
10　NECとの打ち合わせ
12　留学生オリエンテーション
　　星野雅英学術情報センター課長補佐とシステム検討WGとの懇談会
13　学術雑誌総合目録欧文編データ記入説明会
19　KITE作業班打ち合わせ会議
　　平成4年度第2回総合目録データベース実務研修会（学術情報センター）12月3日まで

12. 3　平成4年度国立大学附属図書館事務部長会議（琉球大学）
9　附属図書館自己点検・評価WG会議
15　全学図書系掛長会議・館内掛長会議
　　図書館業務システム検討総括WG会議
18　中国科学院外事幹部代表団中央館見学
22　KITE作業班打ち合わせ会議
1.18　KITE専門委員会
19　附属図書館商議委員会
21　図書系職員研修会（大型計算機センター松延栄治助手の講演会）
22　全学図書系掛長会議
25　学内LAN対策会議
26　NECとの打ち合わせ
28　ILLシステムアンケート結果に関する懇談会（学術情報センター）
　　NECとの打ち合わせ

編集委員　**主査**・松本　連蔵，**委員**・山田　律子，光安　信人，浜崎　修一，出島　照義，園田　国昭，古賀　幸成，吉村　俊亮，青柳　良輔

九州大学附属図書館報「**図書館情報**」　Vol. 28, No. 4（通巻166号）
1993年3月1日・発行人　近　藤　禧　禔　男
発行所　九州大学附属図書館・〒812 福岡市東区箱崎6丁目10番1号　電話 641－1101　内線 2454